

Remembering Nanjing 2011

ファシリテータとしてのリフレクション

アルマンド・ボルカス

MFA, MA, MFT, RDT/BCT, カリフォルニア統合学研究所准教授
リビングアーツカウンセリングセンター・クリニカルディレクター
リビングアーツプレイバックシアターアンサンブル・ディレクター
Healing the Wounds of History Institute ディレクター

中国と日本の学生を中心とする 40 名が、2011 年 10 月中国の南京師範大学会議場に南京大虐殺の遺産に対峙するため輪になって集っている。1 人の日本人男性が泣きながらひざまづき、「南京のレイプ」として知られるようになった歴史の幸存者である盲目に近い華奢な 83 歳の女性の前に平伏している。日本文化では、このような深い礼の動作は深い恥、謝罪、従順などを表す。男性は彼の祖先の代わりに許しを乞うている。1937 年、中国の南京市で、日本兵達は彼女の家に入り彼女の両親、祖父母を殺害し、13 歳と 15 歳の姉を強姦し殺害した。抵抗した彼女は 3 度も銃剣で刺され意識不明になり、死に行くままに放置された。幸存者はその時 8 歳だった。彼女は血だらけで息も絶え絶えだったが、恐怖におびえる 4 歳の妹が母を求めて泣く声に目覚めた。子ども時代を突然奪われ、妹の保護者になった。日本の加害者から隠れ、一緒になんとか「安全地区」に逃げ延びた。

その日本人男性は、涙と苦悶に声を震わせて老婆に語りかける。「あなたの苦しみの記憶を忘れることはありません。」深い共感と痛みの混じる中、幸存者は日本人男性を立ち上げる。「日本の軍国主義者がしたことです。あなたはそこにいませんでした。あなたの責任ではないのです。」男性は自分の国の過去に恥を感じているが、それをどこに置くべきか、どのように乗り越えるべきかわからず、謙虚に身を引き、幸存者の語りの証人である日中のワークショップ参加者

の輪に戻る。

この感動的で自発的な謝罪と許しの儀式は、日中のある傷のシンボルである南京大虐殺の遺産に直面するために集った日中参加者の対話の中核を成すものだった。第二次世界大戦後世代二世、三世から成る参加者のグループは、戦争の集合的記憶と戦争のトラウマを見つめることに合意をして集まった。相反する気持ちで、しかし好奇心や自分達の国に憑いてる亡霊の姿を明かす精神的な必要性に迫られて、参加者はまだ地図に描かれていない感情の領域に分け入った。

謝罪をすることで、日本人男性は南京大虐殺の遺産に直接向き合うことに対する大きなタブーを壊している。南京は日本では物議を醸すテーマである。戦争犯罪の責任を受け入れるかどうかについて、国は、アンビバレンスを持っている。それは屈辱的であり、集合に恥をもたらず。「面子を保つ」といった文化的価値感が、日本社会が直接この遺産について振り返ることを妨げている。この日本人男性は、犯罪が起こったその場所で謝罪しているのである。このような良心の呵責の立場に立つこと自体、日本人参加者は勇気を必要とすることである。日本でこのような活動が知られたり公表されたりしたら、右翼の復讐のターゲットになる可能性もあるのだ。では、日本市民はどうして自費で中国に出かけ、自分達が行なっていない犯罪のために謝るのだろうか？どのような人間の欲求がこのような衝動を起こすのだろうか？「南京を思い起こす」プロジェクトは、ただ個人に歴史の遺産の重荷を乗り越えるための方法を提供することが目的だろうか？それとも、集合的、または社会的変容の目的があるのだろうか？

私達はプロジェクト企画者やセラピストとして、日本と中国の文化にセラピー的な介入をしようとしているのだろうか？2007年、2009年に続いて2011年、日本からのグループを南京に導いて、私達は日本と中国の社会が癒され健全なありかたを取り戻すために何を必要としているか、私達が信じるところを実際に行なうことができているだろうか？日本人の個人的そして集合的な謝罪は、加害者と被害者が歴史の記憶の霧の中に消え行こうとしている中で意味を持つのだろうか？もしそれに価値や意味があると判断したなら、「南京を思い起

こす」の試みが如何に感動的でパワフルなものであっても、中日関係に実際的なインパクトをもたらすために、次にとるべきステップは何だろうか？この斬新な試みが、ただ広大な異文化間の葛藤と不理解の海に溶けて消えてしまうのをどうしたら防げるだろうか？

2011年10月の南京に来て、私はこれらのことを自分に問いかけた。2009年に前回の「南京を思い起こす」をファシリテートした経験から（Volkas, 2010）、私は再びドラマと表現アーツ、演劇のスキルを使ってファシリテートした。使ったのは、私の、Healing the Wounds of History という文化間葛藤や集合的トラウマへのアプローチである（Volkas, 2003, 2007, 2009, 2010）。

Healing the Wounds of History は、即興、サイコドラマ、ソシオドラマ、表現アーツセラピー、ドラマセラピー、プレイバックシアターなどと、南京大虐殺の数世代後の心理的、感情的、そしてスピリチュアルな影響を探求するというセラピーのプロセスを統合するものである。

日中の参加者はこの幸存者がこの酷い歴史の一章の最後の証人の一人であることを知っており、交互に南京大虐殺の幸存者に敬意を表している。一人ずつ、サバイバーのお話が自分にどのような影響を与えたかをシェアしている。二十代後半の中国人男性が彼女に話しかける、「親愛なるお婆さん、私はあなたの深い許しの気持ちを感じます。あなたはとても苦悩したにも関わらず、とても大きく寛容な心を持っています。あなたの話を聴くとき、私の中には深い憎しみが沸き、どのようにそれを変容させたらいいかわかりません。でもあなたのように、私も自分の心を広く持ちたいです。お婆さん、私達にあなたの証人にならせてくれて本当にありがとうございます。」

中国人が日本人に対面する時、何十万もの死者がその間に橋を架けるのが難しい深い溝を作っている。中国の歴史の傷は深い。過去は忘れられてはいない。日本の軍国主義者によって始められた戦争はおおよそ二千万人の中国人を殺害した一膨大な集合的トラウマがこの国の内側で響いている。同時に日本と中国は新しい経済協力を作ろうとしているが、歴史の亡霊はこの二つの強国の関係に影響を与え続けている。したがって、中国に謝罪をしにやってくる日本人の行動は、個人的であり、政治的でもあると言える。

個人的、集合的謝罪の意味と構造は何であり、歴史のトラウマを癒す力があ

るのだろうか？もしそうならドラマや表現アーツは日本と中国の間に謝罪を構築するツールとなるだろうか？

謝罪は「ごめんなさい」と言葉を発するだけではない。謝罪はパフォーマンスである。オセンティックなパフォーマンスである。謝罪の中では、悲哀や、後悔、恥、謙虚さを見せる必要がある。感情、脆弱さ、親愛などが受け入れられ、深く痛い後悔が明らかになる。これらの気持ちは人々が何か間違いを犯し、それに対して完全な責任を持つ時に体験する罪悪感の一部である。謝罪は効果的な場合、浄化や清めの作用がある。起こった事をなかった事にしたり、取り去ったりすることはできないが、なぜか効果があるのである。結局謝罪は恥とパワーの交換である。私は謝罪には癒しの力があると信じている。

揚子江を見渡す岩山の上に大きな大理石の記念碑が立っている。25段の狭い階段がそこに向かっていて。記念碑には1937年にここで何が起こったかが刻まれている。日本語も話せる中国人参加者が、その文章を日本人の学生達にもわかるよう読み上げた。それを朗読しながら彼女の声は感情に震えていた。74年前何万人もの一般市民が侵略日本軍によってこの場所で虐殺されたという。そして、その殺戮の日々、河は赤く血に染まって流れたという。処理し易いよう河岸で大きな集団ごとに縄で繋がれ、犠牲者達は一斉に機関銃で打たれた。男、女、子供の死体は南京中心部の河を流れ、すでにトラウマを持った市民に更なる恐怖を与えた。

沈黙の中で、日中の学生は二人ずつ並んで記念碑への石段を登った。記念碑のベースに花を置き、ここで命を失った人々に敬意を表して頭を下げて祈り、そして沈黙の中で内省する。学生の輪に囲まれた石碑がここに集った証人達の目には、まるで一瞬消えたかのように見えなくなる。石碑の後ろから表れると、二人はもう一度礼をして、手をつないで階段を下りると、次の日中学生のペアが階段を上り、同じ儀式を繰り返す。

その後、グループは日中別々に別れ交代で石碑を囲み、沈黙の中、加害者と被害者の子孫という違いがあることを痛みの中で認める。「南京を思い起こす」の最終日となる四日目、日本人と中国人は集合的悲しみのなかに深く入っていく。中国人参加者は突然子どもの頃に学んだスローガンを叫び始める。かれらは被害のトラウマを深く感じながら、そのスローガンによって、未来の困難に

立ち向かうために強くある決意を表現する。その叫び声は怒りを帯びているように聞こえる。彼らは決して弱く脆弱な国にならないように誓っている。日本人参加者は輪になり、加害の重荷を表現している。折り曲がって頭を下げ、集合的な良心の呵責を表現している。グループの中には加害を背負う苦悩と痛みで泣いている人もおり、その泣き声は厳粛な儀式の静寂を突き破る。

このような儀式が行なわれるのはこれが三度目である。2007年に行なわれ、南京での集いの終盤の儀式として行なわれている。儀式は毎年基本的な形は変わらないが、その演出に微妙なバリエーションがある。儀式と間接的なコミュニケーションスタイルは、日本と中国の文化に内在するものである。揚子江でのセレモニーは、双方のグループが感じている悲哀を受け止める役割をする。つまりセレモニー自体が、日本人が悲劇が起こった場所に来て、彼らの祖先が行なった悪行を認め、後悔の念を表す謝罪のパフォーマンスと儀式である。この儀式が行われる度に、シンプルだが感動的な美しさがあると感じる。ここでは、ドラマと表現アーツセラピーの信条がその力を発揮している一儀式やセラピー的な一瞬をより美しくできるほど癒しと変容の可能性は大きい。儀式によって形成された変性意識の中では、圧倒的な感情には収まる所が与えられ、日本の謝罪が表現される。

しかしこの儀式と「南京を思い起こす」のプロセスがどんなに感動的で美しくても、何か未完成のように感じた。私は2009年に南京を去るとき、個人的な感情の層がもっとあるのではないかという同じような感覚を持っていた。Healing the Wounds of History を使って複数の文化対立を扱った私の体験から、しばし二つの対立するグループはクリエイティブアーツプロセスによって簡単に作られた温かさと親密さに素早くしがみつくと衝動を持つ。参加者は驚くべき安堵で「敵」同士もお互いを好きになれることや、共通点があることに気付き、和解のゴールは達成されたように感じる。しかし、この親密さは、傷つき、恥、激怒、といったより困難な気持ちを探求したり表現することを妨げることがある。したがって、ワークショップの終盤であり、理論的にはクロージャーに向かうべきではあったが、私はリスクを犯して、歴史の傷を再び開くことにした。私は参加者に完全に表現されていない気持ちをより深く見てもらいたかったのだ。このような素直さなしに日中の参加者の間に本当の謝罪や和解はあり得ない。

双方のグループは、苦勞して手に入れた親密さにしがみついたまま、ひるまずに自省することができるだろうか？

揚子江の儀式の後、私は南京師範大学の会議場に集まった参加者にもう一度語りかけた。「みなさんとの時間は残すところ、あと数時間です。午後はクロージャに向かいたいと思います。儀式はとても感動的でした。それは数日間で喚起された私達の悲哀の感情のすべてを受けとめてくれるものでした。しかし、さよならという前に、もう一度謝罪のあり方について見てみましょう。なぜならそれがこのワークの大切な部分だからです。今、私達は感情の領域にいますが、これから数時間は一步下がって自分の中に何が起きているかを見て欲しいのです。自分達を感情の実験のために使って、謝罪にはどのようなステップが必要なのか、そしてそれが日本と中国の間の関係にどのように応用されるべきか見てみましょう。」

リサーチをしてみると、個人的そして集合的な謝罪には主に8つのステップがあることがわかった。次のようなアウトラインとなる。

1. 侵害、冒瀆、侮辱的な行為
2. 言語的または非言語的謝罪の必要性
3. 傷付けたこと、傷付けられた側の絆が損傷したことを認める
4. その出来事の中の自分の役割について認め、責任を取る
5. 謝罪というパフォーマンスの中で後悔、悲哀、良心の呵責、恥、謙虚さが表現される
6. 許しが与えられる—その出来事が許されたり、受け入れたりすることが可能なものであれば。許しの拒絶も可能であり、謝罪になくってはならないものではない。
7. 感情的または物質的修復や補償は、受け入れ可能な謝罪には不可欠なものだが、いつも可能な訳ではない。時には間違いを正すためにどうすることもできない。
8. 変化する約束が明確に、または黙示的に示され、それが再び起こらない誓いが立てられる。

ワークショップの中で、謝罪の8つのステップが与えられ象徴的なタイトル

が日本語と中国語で示される。

1. 破壊
2. 謝罪の必要性
3. 承認
4. 責任を取る
5. 謝罪
6. 許し
7. 修復
8. 約束

日中の参加者はペアになり、協力してこれを演じた。共に協力して、謝罪のダイナミックを体系的に探求した。各ペアは人間彫刻をつくった。体を使って8つのフェイズのひとつひとつのエッセンスを表現するイメージとして形にした。イメージは3ペアずつグループの前で演じられた。

それぞれのステップのタイトルを告げると、それぞれのグループが謝罪のサイクルのそれぞれのステージの凍りついたイメージを作るためにスローモーションで動く。このプロセスは視覚的にインパクトを与え、グループが謝罪について多角的に理解し統合しはじめる道筋になる。イメージのひとつひとつが参加者が共有するジオラマのように焼き付く。

恥、屈辱、謝罪の心理の第一人者である精神科医のアロン・ラザレ (Lazare, 2004) は、謝罪が成功し変容をもたらすためには、傷つけられた側の特徴的な心理的欲求をある程度満たす必要があると言う。最も大切な欲求の一つは、自尊心と尊厳の回復である。屈辱は、無力を感じる状況の中で人が不当に下にされたり、卑下されたり、品格をおとしめられたり、馬鹿にされたり、下位にされたりするときに生じる。

日本と中国の関係においては、戦争の中で膨大な屈辱を体験した中国人は、自尊心と尊厳を回復する必要がある。彼らは面子を回復する必要があるのである。

四日間のワークショップの間、中国参加者は彼らの巨大で威厳に満ちた国が

弱く、小さな日本に支配された事に対しての屈辱や恥の気持ちを表現していた。日本の政府や悲劇が起こった事を否定する様々な形態の日本の右翼による承認が足りないため、そこにいることを無視されているような気持ちになる。これは中国社会で日本に対する静かな怒りをつくる。この怒りは手の届く所にあったが、「南京を思い起こす」の参加者は終盤までこれを表現していなかったため、以下のようなソシオドラマのエクササイズをすることにしたのである。

私はグループの前に立ち、椅子を向かい合わせて部屋の前方に設置した。そして次のソシオドラマエクササイズのやり方を告げた。「この椅子は傷つき、怒り、反抗的な中国の顔またはマスクです。この椅子に座るときは、傷つきと怒りの中国のスタンスからこのようなことは二度と起こさせないと表現しているのです。第二次世界大戦で日本から受けたような屈辱から中国を守るため強くなろうと誓っているのです。しかし、この中国の椅子の後ろに立ったり、座ったり、膝間づいたりする時は、マスクの後ろにある傷ついた弱い気持ちを表現します。もし中国が一人の人だったら、みなさんは自分の内側にある傷ついた子どもの心から何を言うのでしょうか？何を感じ、日本人から何を必要としているのでしょうか？

次にもう一つの椅子に付いて説明する。「この椅子に座る時は、怒り、傷つき、反抗的な日本を表現します。この極端に反抗的なスタンスは、日本社会の中にある極端に防衛的で反抗的な声を示します。この椅子に座った時は怒り、反抗、否定、そして南京とアジアであなた達の軍隊が第二次世界大戦中に行なった責任を取る事を拒否するスタンスを表現します。でも、この椅子の後ろに座ったり、膝間づいている時は、日本のマスクの後ろにある傷つきや弱さから発言します。日本という国が一人の人だったら、あなた自身の中の傷ついた子どもの立場から何を言いたいですか？何を感じ、中国の人から何を必要としていますか？このような悲劇を引き起こした兵士の子孫として、どのような感情的な欲求や権利を必要としていますか？

1人ずつ、中国人と日本人は集合的な役を演じ始めた。個人的にそしてグループとして発言する：

日本人男性（中国の椅子から）：「父の罪は子の罪です。」あなた達の子孫がしたことを受け入れなくてはならない。日本よ、これがあなたの運命と責任なので

す。

中国人女性（椅子から）：数名の首相しか謝る勇気を持っていない。ドイツは被害者に謝っている。十分の一の政治家しか謝っていない。とても臆病で、中国の痛みを解っていない！

日本人男性（椅子の背後から）：自分の弱さを中国に見せたくない。これは恥ずかしすぎる。自分の周りに鎧を作って、自分を守りたい。事実を受け入れたくない。とても怖い！

日本人男性（椅子から）：ぐずぐずうな！中国よ、お前は最近の歴史の中でたくさんの人を殺して来た。高尚で偽善的だ。そのような立場か私達を判断するな！

日本人男性（椅子から）：中国よ、あなたが必要だ。私達は経済的にあなたに頼っている。100年後には中国の植民地化しているかもしれない。あなたはとても早く成長している。怒りに勢い付けられ、パワフルになっている！

中国人女性（椅子から）：経済は戦争だ！日本よ、なぜ泣いている？

アルマンド：今からこの椅子を動かして、日中の人々が付けているマスクを外します。マスクによる守りなしで対話をしてください。個人的に、また集合的に。心から、何を感じ、お互いから何を必要としていますか？中国人のみならず、日本の友達から謝罪がほしいですか？

20名の日本人と20名の中国人がそれぞれのグループアイデンティティと向かい合っている。

日本人女性：もう戦うのをやめてほしい！これ以上中国を傷つけないよう、日本は痛くても歴史を認めてほしい。

中国人女性：これまで見下されて来た。屈辱を受けて来た。いじめられて来た。日本だけでなく、他の国からもだ。これは重荷だ。この歴史を見て何度も何度も傷ついてほしいですか？私は友達に傷ついてほしくないから、南京虐殺記念館に連れていくことができません。天皇は力を持たず、シンボルであることは知っています。でも天皇はこの歴史を終わらせ終止符を打つのを助けることができます。今の天皇に中国に来て、南京大虐殺記念館に来て謝罪をしてほしい。これは両国を癒しこの悲惨な歴史から私達を救ってくれると思います。

中国人男性：私達は被害意識にふけているわけではありません。本当の事を見

てほしいのです。他の日本人に知ってほしい。知ったら、関係を変えることができます。あなた達に真実を見てもらう必要があります。

日本人：困難な真実ですが、見たいと思います。（複数の日本人が同様の気持ちを表す。）

中国人女性：積極的に何かしてください。

アルマンド：行動を起こしてほしいのですか？

中国人女性：はい！

中国人女性：跪いたりして尊厳のない謝罪は欲しくありません。私達が欲しいのはただ歴史を知ってもらうことです。

中国人女性：傷ついた心が一緒になって一つになるといい。

中国人男性：日本の政府に日本人を代表して戦争の遺産について何かしてほしい。日本の軍隊が南京に来たとき始めにしたのは日本の旗を立てることです。フランスでもドイツでもなく、日本でした。あなたの横柄さは私達を深く傷つけ侮辱しました。

日本人女性：日本の政府について話されると無力感を感じます。圧倒されます。私達の政府に対して何の力も持っていないと感じます。今みなさんが心の中にあることを正直に伝えてくれていることが嬉しいです。みなさんの怒りがあることを知っているのをそれを聞いて少しほっとしています。深く感謝します。本当のことを伝えてくれていることを。

日本人男性：あなた達は右翼の話をしつづけます。でもたくさんの教師や研究者が真実を明かすために戦後戦って来た。でも中国人の憎しみの声が聞こえる。私達はこのトピックについてやめたいと思う。士気をくじかれます。私達もあなたのサポートと応援が必要なのです。お願いします！

アルマンド：中国人の参加者に、あなた達がしてきたことやあなた達が変化していることを認めてもらいたいと思っているのですか？

日本人参加者：はい！

アルマンド：中国人参加者のみなさん、日本の友人達がこうして南京に来たことはみなさんにとってどんな意味を持ち、どんな変化が見えたか、言ってあげてくれませんか？

中国人女性：私達の歴史はとても重いです。このプロセスであなた達の重荷を

おろすことができたことを願っています。日本人のみなさん、南京に来てくれてありがとうございます！あなたの行動は私達にとって深い意味があります。諦めないでください！

中国人女性：日本の右翼の圧力があることは知っています。みなさんのように私達の集合的な歴史を十分理解している人達がいることも知っています。そのような人達を尊敬します。みなさんを深く尊敬しています！

中国人男性：一緒により良い世界を作って行きましょう！

アルマンド：このプロセスは痛みを伴いましたが必要でした。今何を必要としていますか？

参加者がどうするか考えているあいだ、緊張した沈黙が続く。

中国人女性：日本の友達と握手をしたいです。私達はみんな世界の平和がほしいと思っているから。

中国人男性：同じ場所に向かって一緒に歩いていきたい。

アルマンド：握手をしたいですか？

中国人女性：日本人の友達を抱擁したいです。

アルマンド：ではそうしたいと思えば、思い思いに、握手をしたり、抱擁したりしてください。

一人ずつ、日本人と中国人参加者は握手をした。殆どの人は、ソシオドラマのテンションを解放する涙をながし、抱き合っていた。

この痛みをともなう、しかし感動的な日中市民の最後の対話を通して、参加者は憎しみや戦争の遺産について直接的な対話や憎しみにも耐え、サバイブすることができ、友情を傷つける事なく深められるということを学んだ。Healing the Wounds of History の介入としてソシオドラマを使う事を通して、グループは両国にとって大切な「面子を守る」ことのためにタブー視することを乗り越えることができた。どうしたら自分の家族、社会、国に、恥をもたらす事なく、「面子を保ち」謝罪できるだろう？これは現在も続く問題で、中日関係の中の政治的に密接な関係を持つ。しかし、二つの椅子のエクササイズで日中の外側の「顔」を表し、日中参加者に集合的なグループとしての声を聞く事で、より自由でオセンティックに対話する許可を与えた。このエクササイズで行なわれた、直接的で挑発的な発言の多くは、個人として表現する事をするよう促され

でも出てこなかったかもしれないものである。

この短い記事のなかで変容的な四日間の間起こった多くのすばらしいことについて書く事ができないが、私の心と頭脳に留め、将来グループの対立のワークに活かすために私の心と頭脳に留めておきたい。「南京を思い起こす」を企画してくださった村本邦子博士と南京師範大学で三度目の集いの場を提供してくださった張連紅博士に感謝します。20年前に「南京を思い起こす」を始めるきっかけとなるビジョンを持っていた村川治彦博士のリーダーシップに感謝します。友人、同僚、HWHの頻繁な協力者である笠井綾氏の繊細で巧みな通訳に感謝します。プレイバックシアターアーティストでありドラマセラピストであるエディ・ユ-氏は寛大にも中英通訳、コンサルタント、コ・ファシリテータとして尽力してくださいました。エディ・ユ-氏と宗像佳代氏は三日目の夜、プレイバックシアター公演の美しいファシリテートをしてくださいました。日本のプレイバックーズと中国のプレイバック・フレンズのアクターと音楽家はすばらしい演技でパーソナルストーリーを中国語と英語で演じたことは、日中の協力と和解のシンボルとして私の脳裏に永遠に焼き付いている事でしょう。プレイバックの俳優達はその場に共感的な文化を作ることでプロセスに深みを与え、「南京を思い起こす 2011」の成功に大きく貢献しました。日中通訳を疲れを知らぬ様子で行なってくださった羅萃萃さんに感謝します。彼女は私達のこのデリケートなプロセスになくってはならない繋でした。最後に、私達を信頼し、自分達の国の感情のリーダーになってくれた「南京を思い起こす」の参加者のみなさんに感謝します。彼らはリスクを冒し、集合的なトラウマが癒しに向かうために後続くこれからの人々のために新しい道を切り開いたのです。

2011年11月

References

- Davis, Laura, *I Thought We'd Never Speak Again: The Road from Estrangement to Reconciliation* (pp. 226-238), New York: HarperCollins Publishers, Inc., 2002.
- Lazare, Aaron, *On Apology*, New York: Oxford University Press, 2004.

Leveton, E. & Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Germans and Jews Facing the Legacy of the Holocaust. In *Healing collective trauma using sociodrama and drama therapy*, Leveton, E (Ed.), (pp. 127–146) New York, NY: Springer.

Miller, R. & Volkas, A., (2007) Healing the Wounds of History. In A. Blatner & D. Wiener (Eds.), *Interactive and improvisational drama: Varieties of applied theatre and performance* (pp. 34–44). New York: iUniverse.

Volkas, A. (2003). Armand Volkas keynote address. *Dramascope: The Newsletter of the National Association for Drama Therapy*, 23(1), 6–9.

Volkas, A. (2009) Healing the Wounds of History: Drama Therapy in Collective Trauma and Intercultural Conflict Resolution. In D. Johnson & R. Emunah (Eds.), *Current approaches in drama therapy* (pp. 145–171), Springfield, IL: Charles C. Thomas.

Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Japanese and Chinese Cultures Facing the Legacy of the Nanjing Massacre., In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 130–156), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.